
きっと、神様は救えない

緋渡ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつと、神様は救えない

【Nコード】

N9284P

【作者名】

緋渡ヒロ

【あらすじ】

かつての優しかった王は、もういない。

激情に身を任せ、血で血を洗う戦場を作り出す、修羅の王となったのだ。

平和と退屈に塗れた日常を過ごす、現実世界の少年、立花隆人。

祖国奪還を掲げ、仲間と共に世界を駆ける解放軍の少女、ソプラ。

二人の出会いが運命を変え、崩壊へと向かう異世界の未来を取り戻す道標となる。

歩き出せば、過酷な世界。

さねど耐えられる、仲間と共に歩むのならば

序章：煤と光のダイパーチャー（前書き）

処女作、というわけではありませんが、どれもほとんど書かずに頓挫したので、ほぼ処女作です。ご意見・ご感想ありましたら、是非お願いいたします。初心者なので、右も左も分かりませんので……。

序章：煤と光のディパーチャー

瓦礫と灰で覆われた床。半壊した壁。面積の半分は穴の空いている天井を仰げば、途切れ途切れの空と剥き出しの煤けた梁が見える。私が少し動けば埃が舞い、室内の空気と混じり合う。

何処かの廃墟。名も知らない教会。崩れた街の中、かろうじて原型を留めていたこの建物に、私はふらりと足を踏み入れた。

死体がないことだけは幸いだった。そんな所で、祈りたくはない。それなら、その骸に対してまず祈りを捧げるべきであるし、でも、私は自分のことで精一杯で。他のヒトに気を遣える程、私の心に余裕はなかったから。

何人も、何十人も、何百人も。私の仲間が死んでゆく。

私は彼らの想いを背負い、志を継ぎ、戦わなければならない。それは望まれたことでもあり、また、私が自ら決めたことでもある。

それでも。

「女神様、私はもうダメなのかもしれません」

こんなこと、仲間の前ではとても言えない。

入口から続く乱れ倒れた長椅子の群れの、その奥側。ぽつんと置かれた教台と女神様の像の亡骸に向かって、私は歩く。半身が崩れ、立っていることが不思議なほど無惨な姿の女神様は、それでもなお、微笑んでいた。

羨ましい。そんなに強くあれたら、どれだけ楽になるだろう。

膝を落とし、私は跪いた。もう、自分で立つことにも疲れた。

「女神様。私は、私は」

情けない。涙が止まらない。そんな自分に少しでも抵抗したくて、きゅっと目を閉じる。

無駄だった。後ろ向きの感情ばかりが頭の中を蹂躪して、私のちっぽけな誇りや使命感は目からどんどん溶け出ていた。

私は無力。例え皆から支えられていようと、そんな支えの上に立つ私はこんなにも矮小な一人の人間でしかないのだから。単純に悔しかった。そんな自分が、ではなくて、それを理解してしまっている自分が。

「……助けて、ください」

理性で留めていた筈の感情が堰を切ったように流れ出す。もう、止められなかった。

本当は知っている。路を切り拓くのは、祈りみたいな他人任せの儀式なんかじゃなくて、自分の行動と強いチカラ。知らない訳がない。だけど、理屈じゃないでしょう？ 何かの戯曲なら、こんな時女神様が手を差し伸べてくれるのかもしれないけれど、でも、ここは現実で。女神様の像を見上げて、やっぱり何も変わらなかった。

そして、ここで祈っていてもやっぱり何も変わらない。それに気付くまでどれだけの間こうしていただろう。現状を客観視して、どんどん気が滅入ってしまうだけなのに。

「ふう……」

裾で涙を拭いて、ゆっくりと立ち上がる。埃で服も汚れていたから、目の周りが黒くなってしまったかもしれない。でも、赤くなっただ目を隠すにはちょうどいいのかな。そんなことを考えると、少しだけ気が楽になったような気がした。弱音を吐くだけ吐いたからかもしれないけれど。

「ありがとうございます」

どんなに私が泣いていても、女神様は手を差し伸べてはくれない。でも、微笑んでいてはくれた。それがとても嬉しくて、私は無意識にお礼を述べていた。

行くしかない。やるしかないんだ。

悩んでいたって、いつかはその時が来る。それを選んだのは自分なのだから。悩んでもしょうがないのだと、今更ながらに気付いた。晴れやか、とまでは言えないけれど、随分気持ちが悪く落ち着いた。何一つ変わらない現状に、ほんの少し風穴があいたような、そんな感じがする。

もう一度女神様にお礼を述べて、さらに一礼。欲を言えば誰かに言いつけて修繕したいところだけれど、そんな余裕もない。これだけで許していただくことにする。いざという時は頼るくせして、解決した途端にこれかと、私ですら思ってしまう。女神様はたいそうご立腹かもしれない。

ちよつぱり罪悪感を抱きながら、私は入口まで続く瓦礫の路を歩く。きつと、女神様はそれでも微笑んでいるんだろう。

そんなことを考えていたものだから、私はこれが女神様が下した天罰なのでは、と一瞬本気で思ってしまった。

突然の出来事だった。

女神様、ではなく穴の空いた天井からまばゆいばかりの光が溢れ出し、音もなく室内を覆いつくしたのだ。雪よりもなお白く、どんな宝石にも勝る気品を備えた白光は、あっという間に私の視界を奪い取ってしまった。

不思議と光に恐怖することはなかった。幼い頃感じた、母の抱擁の温もりに似た暖かみ。光から受けた印象としては、それが一番近い気がする。おおよそ形容し難い何かを孕んだ光は、随分と長い間私を包み込んでいた。

果たして数秒だったのか、数分だったのか。時間の感覚すら奪い取られた白の空間に、ようやく別の色が戻ってきた。何処からともなく現れた光は、何処からともなく消え去り、また薄汚れた廃屋の風景が目の前に広がった。特に変化はない、と思う。

「……ううん」

驚愕で体の芯から凍りついた。刹那の膠着を経て、声の聞こえた方向、後ろへと頭を動かす。

女神様の像の前にヒトが倒れていた。先程までは、確かに存在しなかったハズ。空間転移の魔術なんて聞いたこともないけれど、他に思い当たる節もなかった。何処かから忍び込んだ、というのも、先刻の光の意味が説明できなくなるのでまずあり得ない。

声が聞こえたということは、少なくとも生きてはいるということ。まして、未知の力を持っている可能性が高いのだから、いくら警戒してもし過ぎるということはない。

無意識のうちに、私は短剣を握っていた。武器を握っているだけで、少し安堵する自分がいることが悲しかった。

よくよく見てみると、随分と奇妙な格好だった。仰向けに倒れた少年は、人の絵が描かれた白地のシャツに、だぼだぼの灰色のスボンのようなものをはいている。傍らに落ちているものは黄緑色をした半透明の取手付きの箱と、真新しい革表紙の本一冊。奇妙と言うよりは、新鮮とか斬新とか珍しいなんて言葉の方が相応しいかもしれないなかった。

少年と表現はしたけれど、顔は驚くほど端正で、もしかしたら女かもしれない。ただ、短髪であることと、割とがっしりとした体格から男だと判断しただけ。見たところ武器の類は携帯していないようだったけれど、隠し持っている可能性も捨てられない。慎重に近づく。

「ん……」

彼は、どうやら覚醒したみたいだった。体をそろそろと起こし

「ああ、夢か」

そして、呟いた。

急にこんなことを言いだすものだから、私としては対処に困る。啞然としてしまった。何とも間の抜けた数秒の沈黙が、妙に痛々しい。

きよろきよろと辺りを物珍しげに見まわしていた彼は、ふいにこちらに顔を向けた。必然、目が合う。

「うおわっ！ ……誰？ って、えーと言葉通じるのかな？ ないすとうーみーとうーゆー」

ようやくこちらに気づいたらしい。最後の文は意味不明。でも、どうにか言葉は通じるらしかった。

一つ不可解なのは、何故だか相手側には緊張の色が見えないこと。短剣など意に介さないような実力者なのか、はたまた馬鹿なのか。色々な意味で底の知れない少年だった。

「あなたは、誰？」

声は少し震えていた。口の中の水分が、いつの間にか消え去っていた。

私だつて、そう多くはないにしろ戦場で戦ったこともある。一対一で命のやり取りをしたこともある。けれど、今の状況はそのどれとも異なつた、異質な緊張を私にもたらしていた。

何故異質なのか、その答えは何となく分かる。未知なる力を内包する筈の少年から、敵意を全く感じないから。いや、それだとなんだかしくくりこない。戦闘つていう概念から、この少年の思考は外れているのかもしれない。彼からは鬨の臭いがしなかつたから。

「え、あ、はい。俺はリユート。リユート・タチバナといいます。ここは……何処ですか？」

彼、リユートは驚くほど素直に応えた。幾分高めではあるけど、何度聞いてもやはり声の響きは男性のそれ。かたちだけ剣を構えてはいたが、正直降ろしても良いのでは、とすら思えてくる。少なくとも、構えを解いた瞬間に襲いかかつてくるようには見えなかつた。

「ここはプレス大陸の南東。街の名前は、私も分からない。忘れてしまつたわ」

「プレス……大陸？ そつか……そうですか」

リユートは誰の目から見ても分かるくらい落胆していた。返し方からみて、現在地が分からないことよりも、聞き慣れない単語を聞

いたことに悲観している感じだ。はて、ブレス大陸とえば、現在開拓されきっている大陸の中では最も大きいもの。知らない筈はないのだけれど。

「どうかしたの？」

妙にいたたまれなくなり、私はついつい気遣うような声をかけてしまっていた。素性も知れない危険人物に対して。心の奥底で、コイツに危険はない、と感じ取っていたのかもしれない。あるいは、突然の不可思議な現象に頭が追いついていないのかもしれない。どちらにしても、普段の私なら絶対にやらないようなことだった。

「いえ……。少し途方に暮れていました。ここはどうやら俺の知らない土地のようなので」

冷静、とは少し違う気がする。諦観。そんな二文字が似合う程、彼は寂しげな笑みを浮かべていた。けれど、私は彼に素直に同情してあげられるほど、優しい訳でも心に余裕がある訳でもない。それに、彼から聞き出さなければならぬことが山ほどある。

「そう。それは災難ね。でも、ならどうして、あなたは知りもしない土地に突然現れたのかしら？」

「現れた」なんて言葉を使ったのは、あの光の正体が一番気にか

かっていたから。もしも、それが新たに解読された魔術ならと、考えるだけで恐ろしくなる。でも、言動からしてリユートという少年は嘘を吐いているふうにも見えなかった。言葉が通じることが気にかかるが、国軍の手先という線は薄いだろうから、考え方によっては好機なのかもしれない。

「それは……、正直何と言っているのか。自分でも何でこんなところにいるのかよく分からないので」

本当に、彼は困ったように話している。これで何かを偽っているのなら大した役者ぶりだ。

「ただ、何が起こったのか、ということならお話できます」

信じてもらえるかは分かりませんが、と彼は付け加え、深く息を吐きだした。そして、腰掛けられそうな瓦礫を見繕って、私にもそれを勧めてきた。

仲間を呼ぶことも確かに出来るけれど、それは躊躇われた。何故なら、彼らはこんな如何にも怪しげな人物を、自然体のままで語るせるなんてことは絶対にしないだろうから。

だから、私は彼の話を一人で聞くべきだと思った。ただでさえ、廃墟に光が差した直後に人が現れた、なんて嘘のような話が冒頭から出てくるのだから。私が言っても信じてもらえるか分からない。もし彼にそんなことを喋らせれば、それこそ手痛い制裁が下るのは

火を見るよりも明らかだった。

「お願いするわ」

短く告げて、私は適当な場所に腰を下ろした。おかしなことに、私の気持ちは昂っていた。未知なるものへの好奇心は、いつだって人を駆り立ててやまないものだから。そんな言い訳を考えて、思わず笑いそうになる。自分以外の誰に、こんな言い訳を使うというのか。

「何から話せばいいのかな」

そして、そんな語り出しから始まる彼の話に耳を傾けながら、私はふと思ったのだ。

もしかしたら、本当に女神様に祈りが通じたのかもしれないな、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9284p/>

きっと、神様は救えない

2011年1月9日04時49分発行